

学校の教育活動全体を通して大切にしたいもの
～学級から広がる支援の一例～

能村重信

1. はじめに

本校では、自立活動の「学校の教育活動全体を通じた指導」について学級担任が主となり個別の指導計画を作成している。一人の生徒の支援においては、学級での支援を担当以外の人との意見交換を大切にしながら学部、学校へ広げていくことが大切である。

2. 目的

Kさんの自立活動の「学校の教育活動全体を通じた指導」について学級から学部、学校へと支援を広げていくことが有意義ではないかと考え、実践した事例をまとめる。

3. 対象

中学部3年 K男

KIDS (’03.5.20) : 運動2:9 操作1:6 理解言語1:9 表出言語1:8 概念1:3
対子ども1:2 対大人1:2 しつけ2:10 食事1:8 総合発達年齢1:8
運動としつけの領域が他の領域と比べて高い。

日常生活：食事・排泄・睡眠などの身辺処理能力はある。学校では、登校～給食～着替～下校という大まかな生活の流れを身につけている。

学 習：リズム・音楽・散歩等好きな分野には積極的に参加する。

4. 経過

本年度当初から集団行動が取りにくい等の行動がみられた。担任は寄り添うという姿勢で注意したり見守ったりしていった。

保護者からは家族向けのアンケート（親の願い）や家庭訪問等での話し合いで「学校内で内用ズックを履いて行動して欲しい」との願いが寄せられた。

一方、K男は学校内では大人の注意が多いと心理的に安定を欠き、学校生活そのものを楽しめない様子が見られた。保護者の願いと学校内の様子をもとに学級、中学部会、職員会議で紹介・提案・依頼等を通してK男についての理解を求めてきた。保護者とは授業参観、学級懇談等で共通理解を深めていった。

ズックに関しては話し合いを通して次のことを確認した。

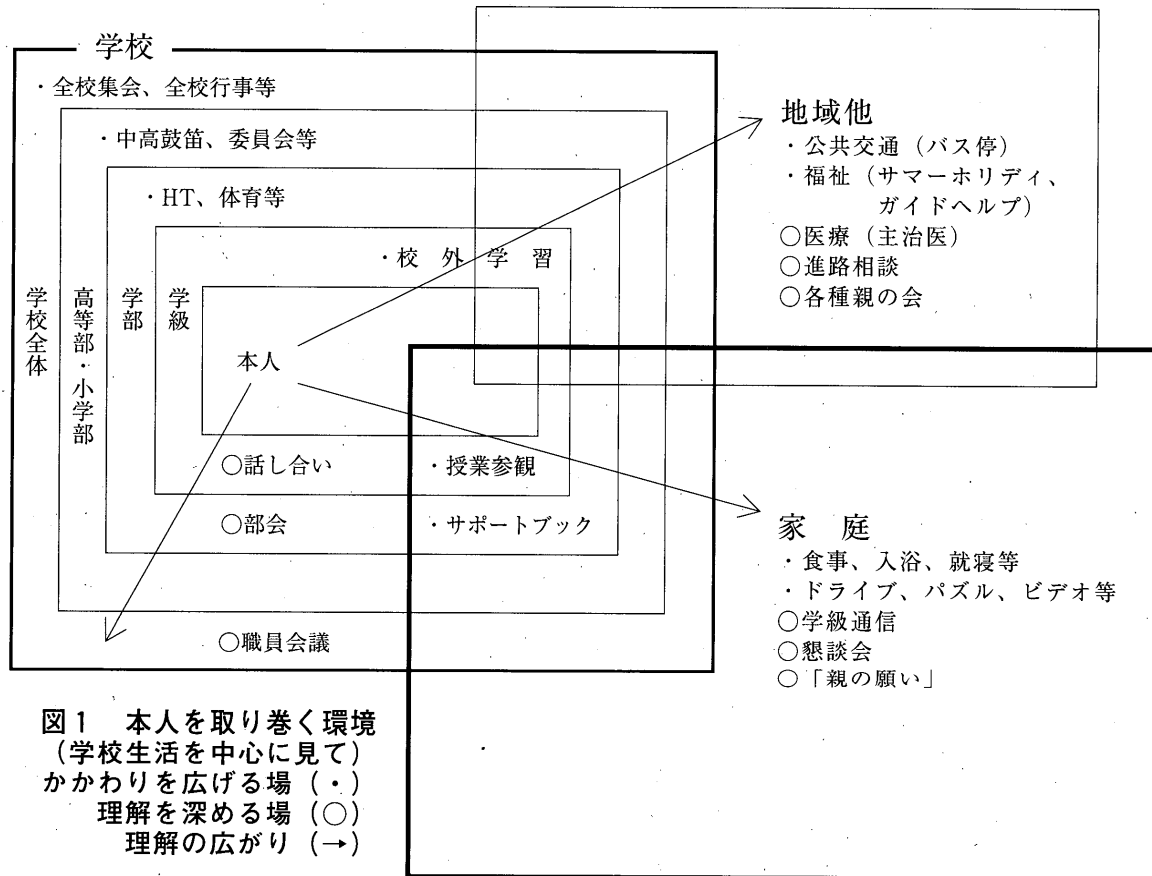
1学期は登校時と下校時及び外出時における内用ズックと外用ズックの履き替えを確実にを行うことを目的とする。校内で内用ズックを脱ぐこと及び脱いでいることに対する注意は極力避ける。ただし給食前など特定の場面でズックを履くことを促すことはかまわない。

2学期も継続して行う。

学校内ではズックを脱いでいることが多いが、外出時などは自ら進んでズックを履いて準備をしている様子が見られる。振り返るとズックのことで注意することが少なくなった。

ブック以外でも本人の心理的安定が増した。言葉や動作でして欲しい事を伝えることが多くなってきた。

5. 考察とまとめ



2学期が終わろうとしている。担任としてK男に対するプラスの評価「笑顔が多くなったね」「怒ることが少なくなったね」等を聞くことができた。また、お母さんからは「学校が好きで、学校へ行くのを楽しみにしています。」と度々聞くことができた。

本研究を通してK男を取りまく環境を一つ一つ整理してK男にとって望ましいものに変えていくことがよりよい支援だと考えるに至った(図1参照)。K男への支援を通して、自立活動の指導で大切だと考えたことを以下のようにまとめた。

- ・実態把握 (日常生活の様子及び発達検査の結果等)
- ・家庭との連携 (保護者の願いを聴く、担任からの説明、意見のすり合わせ)
- ・教育内容の自己選択・自己決定 (本人への説明、本人の意思の確認、納得)
- ・教師間の共通理解の形成 (学級→学部→学校)

また、自立活動グループ研究会において次のような意見を聞くことができた。①現在学部ごとに保管している個人ファイルを年度ごとに引き継ぎ、学部を越えて伝えていくことで充実させる。②関連して、例えば中学部の進路について3～6年のスパンで考えるために中学部から高等部につながる情報提供の在り方を検討していく。

まだまだ課題は多い。今後は、さらに家庭との連携を深め、地域とのつながりに目を向けながら、その子にあった適切な支援を考え実践していきたい。